

- ・ 古今集でどのような漢字が幾度現れているか

全体の表は、頻度が大きいほうの抜粋とし、順位および累積千分率を添える。

万葉集における仮名と漢字	全体			巻1	
	順位	出現頻度	累積比率%	出現頻度	漢字
	1	186	91.2	15	人
	2	119	149.5	7	山
	3	95	196.1	4	花
	4	55	223.1	2	人
	5	51	248.1	4	山
	6	48	271.7	2	霞 桜 春
	7	47	294.7	1	吉 行 今 千 霜 朝 鶴 日 間 名 野 柳
	8	46	317.3		
	9	38	335.9		
	10	32	383.0		
	13	30	412.4		
	15	28	439.9		
	17	25	452.1		
	18	24	463.9		
	19	22	485.5		
	21	21	505.6		
	23	19	524.2		
	25	18	533.1		
	26	17	541.4		
	27	15	563.5		
	30	14	570.3		
	31	13	583.1		
	33	12	612.5		
	38	11	655.7		
	46	10	685.1		
	52	9	711.6		

以上の3点をざっと見たところでは、古今集巻1の漢字比率2.3%および漢字の最大頻度15は、万葉集巻20の2.4%および17を想い起こさせる。扱った万葉集も古今集も分量が小さいので、革めて全体を眺めつつ、本格的な議論は後考を俟つこととしたい。

引用文献

石井 久雄 (2009) 古今和歌集元永本における短歌表記の漢字。

立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要 3, pp. 1-21。

——— (近刊) 古今和歌集元永本の周辺における漢字。投稿中。

遠藤 邦基 (2005) 表記の戯れ。浅田徹・他『和歌をひらく 2 和歌が書かれるとき』

岩波書店, pp. 219-242。

- 古今集で漢字はどのような比率であるか

	全体	巻1	巻20
延べ 文字	28913	1862	968
漢字	2040	44	6
比率	7.0	2.3	0.6
異なり漢字	311	18	5
歌数	982	61	31
平均文字数	29.4	30.5	31.2

- 古今集の一首に漢字が幾字現れるか

全体

	漢字	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
かな	982	250	267	161	114	72	45	25	13	11	7	2	6	3	3	2	1
33	8	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32	53	53	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
31	203	188	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	72	1	68	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29	190	-	173	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	64	-	11	50	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27	93	-	-	74	18	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	55	-	-	13	34	6	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
25	65	-	-	4	42	16	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24	38	-	-	-	14	19	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	34	-	-	-	2	22	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	27	-	-	-	1	7	16	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
21	13	-	-	-	-	1	7	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
20	13	-	-	-	-	-	3	6	3	1	-	-	-	-	-	-	-
19	8	-	-	-	-	-	-	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-
18	6	-	-	-	-	-	-	2	3	1	-	-	-	-	-	-	-
17	5	-	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-
16	8	-	-	-	-	-	-	1	1	4	1	1	-	-	-	-	-
15	5	-	-	-	-	-	-	1	3	1	-	-	-	-	-	-	-
14	3	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
13	3	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-
12	3	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-
11	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
10	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
9	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
8	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
7	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-
6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
5	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1

巻1

	漢字	0	1	2	3
かな	61	28	24	7	2
33	1	1	-	-	-
32	6	6	-	-	-
31	22	21	1	-	-
30	4	-	4	-	-
29	19	-	19	-	-
28	3	-	-	3	-
27	2	-	-	2	-
26	2	-	-	1	1
25	2	-	-	1	1

巻20

	漢字	0	1	2	3
かな	31	27	3	-	1
33	1	1	-	-	-
32	8	8	-	-	-
31	18	18	-	-	-
30	2	-	2	-	-
29	1	-	1	-	-
28	-	-	-	-	-
27	-	-	-	-	-
26	1	-	-	-	1

専ら仮名で記された短歌の比率は、全体で25.4% = 250首 ÷ 982首、巻1で45.9%、巻20で87.0%であり、そのうちの仮名数31の比率は、全体で19.1% = 188首 ÷ 982首、巻1で34.4%、巻20で58.0%である。

ただし、短歌と長歌とで漢字を共有することが、どのような事実を反映しているかということは、いま、分かりかねる。

巻5および巻20の短歌に共通して出現した漢字は、24字あり、次のようである。

巻5短歌と巻20短歌とに共通して出現した漢字

数値は巻5出現頻度+巻20出現頻度、その合計による配列

1+17 見	1+ 5 山	3+ 2 身	1+ 2 間玉原子名
1+ 7 野	1+ 4 年	1+ 3 人	2+ 1 千長鳥難
4+ 3 手	2+ 3 日	2+ 2 道	1+ 1 吾行樹水船馬

この共通の漢字24字に対しては、次の数値を算出することができる。

巻5の短歌の漢字異なり91字に対する比率 26.3% 巻20の76字に対して 31.5%

巻5の側での出現頻度合計 20 巻20の側で 50

巻5の短歌の漢字延べ115字に対する比率 17.3% 巻20の165字に対して 30.3%

巻5の側での出現頻度合計は、直ぐ上の表の「+」の左側の数値の合計であり、その数値を漢字延べで除したものが比率である。巻20では、「+」の右側の数値による。

巻20のほうが、巻5と共通する漢字による度合いが大きいと言えることができる。しかし、「見」「野」の出現頻度の大きさが影響しているであろう。

漢字の頻度については、その場がなぜ漢字で記されたかということが、問われなければならないであろう。しかしながら、いまのところ、立ち入ることができない。例えば、漢字「見」は、巻5と巻20との短歌で出現頻度1対17であるが、澤澤『索引篇』などによっても、形態「見る、見ゆ」などの出現頻度にそれほど大きな開きがあるとは思えない。形態「見」の側から見ると、巻5では、字母「美」による仮名が多い傾きがある、といったことになる。別の課題としたい。なお、巻5における漢字「見」の唯一の出現は、上の、仮名数+漢字数の事例(30+2)5-883のものである。

4 元永本古今和歌集

万葉集巻5および巻20の短歌における漢字の様相は、万葉集全体から見ればほとんど同じようなものであるかもしれないが、それだけ取り上げてみれば、一括りにできないところがある。漢字の比率についても、一首ごとの漢字数についても、出現した漢字についても、上に見たとおりに対照的である。

元永本古今和歌集（以下、古今集）を並べてみる。古今集では、脱字・衍字・汚損がない、一首の文字が揃う短歌のみを取り上げる。その全体は石井（2009）により、特に巻1および巻20はここに改めて取り出す。上で万葉集の漢字を3点から見たので、同様に古今集について数値を算出する。

万葉集卷5・卷20 漢字一覽

(つづき)

卷5		卷20		卷5		卷20		卷5		卷20		卷5		卷20					
漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌
炊		1			昼		1			飯		1			岬		1		
数	1				朝	1	4		1	悲				1	妙	1			
世	3	8			長	2	2	1		被		1			無		3		
星		2			鳥	2	2	1	2	飛	1				霧	1			
盛		1			勅		1			微	1				名	1	1	2	3
青			1		直		1			鼻		1			命	1			
石		1			津	2	1		1	畢		1			明		1		
雪		1	2		痛		1			紐	1				鳴	1			1
千	2		1		庭		1			百		1			綿	1	1		
撰		1			廷		1		1	表		2			木		1	1	
箭				1	天	4	2	3		病		1			目	3	1		1
船	1	4	1	4	伝		1			浜		1			門				1
前		1			渡		2			貧		1			夜		2		
漸		1			土		1			不	1	1			野	1		7	
楚		1			冬			1		夫				1	憂		2		
奏		1			刀		1		2	富	1				有		1		
掃	1				唐		1			布	2	2			夕		1		
早				1	島				1	敷		2			来		2		1
糟		1			湯		1			父		5	3		率	1			
草			1	3	等	1	5			撫		1			立	2	4		1
霜			1		道	2	5	2		風		2	5		累		1		
息		1			内		2			伏		1			靈		4		
足		2			乍		1			覆		1			恋			1	1
速	1	1			繩	1	1			物		1			路	1			
卒				1	南	2	1			文	1				老		1		
打		3	1		難	2		1	4	聞				1	倭	1	2		
待	1				汝		1			平		1		1	藁		1		
戴		1			二	1				辺		1	1		剋		2		
替			1		日	2	5	3	3	遍	1	1			梛	1			
代		2		4	如	1	1			慕	1	1			梓		1		
大	2	8		7	年	1	3	4		母		5	2		瘡		1		
嘆		1			波			1	4	宝		1			絶	1			
歎	1				破	1				方		1		2	纏	1			
短		1			馬	1	1	1		墨		1			輿		1		
端		1			拜		1			麻		1			舳		2		
男			2	1	蠅		1			枕		1			蘆			1	
知		2			泊	1	2			又		1			鶯			1	
地		3	2		白		1	2		沫	1				鹹		1		
筑		1		1	八			1		万	1				鹿	1			
中		2			伴	1	1		1	滿		1			々		4		
漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌
	卷5	卷20	卷5	卷20		卷5	卷20				卷5	卷20				卷5	卷20		

万葉集における仮名と漢字

万葉集卷5・卷20 漢字一覧

数值は出現頻度、短歌で立体、長歌で斜体

卷5		卷20		卷5		卷20		卷5		卷20		卷5		卷20					
漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌	漢字	短歌	長歌	短歌	長歌
愛		2			刈			1		限		1			紫		1		1
安		1			寒		4			古		1			事		3		1
困		1			敢	1				呼		1			兒		1	1	
為		1			灌		1			戸		1			持		2		
衣	1	2			還		1	1		五		2			時		2	2	
一	1				間	1	5	2	1	吾	1	2	1	1	耳		1		
引		2			帰	1	1			御	1	6		3	自		1		2
隠	1				気		1			語				1	七		1		
羽			1		貴		1			乞		2			若				3
雨		2			飢		1			光		1			取		2		
云		2			戲		1			好			1		守				1
雲	1				祇		1			更		1			手	4	5	3	
益		1			久		1			江			7	1	種		1	1	
越		1			宮		1	3	2	皇		1		3	酒		1		
遠	1	1			泣		2			行	1		1		樹	1		1	
塩		2			去	1			1	香			1		秋			10	
奥		1			居		3			高		1	1		十		1		
往	1				虚		2			国	2	7		3	重		2		
横		1			京		1			此		1			出	2	1		2
王		2		4	境		1			今		1	1	1	春			3	3
屋		1			狭		1			根			2		初			1	1
音			1		鏡		1			坐	1	1			緒			2	
下		1			仰		1			妻		3			諸		1		
何		2			極			1		在	2	2			将		1		
加		1			玉	1	2	2		作		1			松	1			
家	2	2			芹			1		桜			1		照		1		
河				1	金	1				雜		2			上		1	1	
火		1			吟		2			三		1			城				1
花			5		銀	1				山	1	1	5	2	常		1		
荷		2			苦	1				産		1			情			1	1
霞			2	1	群				1	使	1				食				1
我	1	3			軍				1	四				2	寝		1		
画			1		繼		1	1	1	始			2		心	1	1		
解	1	1			月	6	4	1	1	子	1	6	2	1	新			1	
海			3	2	堅	2				師		1			神		9		2
皆		1			懸		1			思	1	2			身	3	2	2	
開		1			肩		1			施	1				人	1	7	3	
額		1			見	1	4	17	7	旨		1			尋	1			
掛		1			原	1	1	2	2	枝		1			須		1		
梶			1		言		1	1	1	死		1			水	1		1	

万葉集における仮名と漢字

• どのような漢字が幾度現れているか

巻5・巻20に出現した漢字を、次ページ・次々ページに一覧する。漢字の配列はおおむねJISコードにより、各巻短歌・長歌に分けて出現頻度を示す。冒頭部分を読むと、漢字「愛」が巻5の長歌に2度現れ、「安」「囿」「為」がそれぞれ巻5の長歌に1度ずつ現れ、「衣」が巻5の短歌に1度、長歌に2度現れ、……、「羽」が巻20の短歌に1度……、のようになる。

その一覧を組み換え、短歌における出現頻度で配列する。次のようである。

巻5短歌に出現した漢字 91字

数値は出現頻度、それによる配列
下線は長歌にも出現した48字

u003cdiv data-bbox="200 310 850 442" data-label="List-Group">

- 4 手
- 3 身世目
- 2 家国在出千大長鳥津道南難日布立
- 1 衣一隠雲遠往我解敢問帰去玉金銀苦見原吾御行坐山
使子思施樹松心人尋水数船掃速待歎朝等繩二年破馬
泊伴飛微紐不富文遍慕沫万妙霧名命鳴綿野率路倭栲
繩纏鹿

巻20短歌に出現した漢字 76字

数値は出現頻度、それによる配列
下線は長歌にも出現した25字

- 17 見
- 10 秋
- 7 江野
- 5 花山風
- 4 月年
- 3 海宮手春人日父
- 2 霞間玉原根始子時自緒身雪男地天刀道白母名
- 1 羽音画梶刈極芹吾行香高今桜児種樹初上情新水青千
船草霜打替長鳥冬難波馬八辺木恋蘆鶯

ここでも、巻5と巻20とが対照的な姿を見せる。すなわち、巻5では、出現頻度の大小の幅が、最大を4として狭く、多くの漢字が小頻度ずつ現われる。巻20では、漢字の異なりが巻5より少ないながら、最大出現頻度が17であり、大小の幅が広がっている。

また、漢字を長歌と共有しているかという点でも、巻5では漢字異なり91字のうちの48字=52.7%であるのに対して、巻20では32.8%=25字÷76字である。共有されている漢字の出現頻度の合計、すなわち、巻5で、4度×1字(「手」)+3度×3字(「身、世、目」)+2度×13字(「家、…、立」)+1度×31字(「衣、…、倭」)=70度、巻20で69度を、短歌における漢字の延べに対する比率に改めて、70度÷115度=60.8%、69度÷165度=41.8%としても、巻5の漢字の短歌・長歌の共有の大きさを認めることができる。

(32+ 0)

5- 809 ただにあはず あらくもおほく しきたフノ まくらさらずて いメにしみエむ
20-4497 みむトいはば いなトいはメや うメノはな ちりすぐるまで きみがきまさぬ

(31+ 0)

5- 798 いもがみし あふちノはなは ちりぬづし わがなくなみだ いまだヒなくに
20-4511 をしノすむ きみがコノしま けふみれば あしびノはなも さきにけるかも

(31+ 1)

5- 889 家において はゝがとりみば なくさむる コゝ口はあらまし しなばしぬとも
5- 810 いかにあらむ 日ノトきにかも コゑしらむ ひとノひざノフ わがまくらかむ
20-4345 わぎメコト ふたりわが見し うちエする べゝがノねらは くふしくメあるか

(30+ 1)

5- 887 たらちしノ はゝが目みずて おほゝしく いづちむきてか あがわかるらむ
20-4512 いケみづに かがさつ見エて さきにほふ あしびノはなを そでにこきれな

(29+ 1)

20-4447 まひしつゝ きみがおほせる なでしこが はなノミトはむ 吾ならなくに

(30+ 2)

5- 883 おとにきき 目にはいまだ見ず さよひめが ひれふりきトふ きみまつらやま

(29+ 2)

5- 890 出てゆきし 日をかぞつづ けふゝト あをまたすらむ ちゝはゝらはも
20-4468 うつせみは かずなき身なり やまかはノ さやけき見つゝ みちをたづねな

(28+ 2)

20-4304 やまぶきノ 花ノさかりに かくノゴト きみを見まくは ちトせにもがも

(27+ 2)

5- 830 万世に トしはきふとも うメノはな たゆるコトなく さきわたるづし

20-4295 たかまとノ をばなふきこす 秋風に ひもトきあけな ただならずとも

(26+ 2)

20-4492 つキヨメば いまだ冬なり しかすがに 霞たなびく はるたちぬトか

(12+ 9)

5- 902 水沫〈みなわ〉なす 微〈もろき〉命〈いのち〉も

栲繩〈たくなは〉ノ 千尋〈ちひろ〉にもがト 慕〈ねがひ〉くらしつ

(15+ 11)

5- 903 倭文手纏〈しつたまき〉 数〈かず〉にも不在〈あらぬ〉

身〈ミ〉には在〈あれ〉ト 千年〈ちとせ〉にもがト おもほゆるかも

(6+ 12)

5-895 大伴〈おほともノ〉 御津松原〈みつノまつばら〉

かき掃〈はき〉て われ立待〈たちまたむ〉 速〈はや〉帰坐〈かへりま〉せ

巻5

短歌	漢字	0	1	2	3	5	6	7	8	9	11	12
かな	104	78	5	4	5	3	3	2	1	1	1	1
33	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32	12	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
31	66	64	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	5	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-
29	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
25	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
24	2	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
22	3	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
21	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
20	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
19	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
17	3	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-
15	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
12	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

巻20

短歌	漢字	0	1	2	3	4	5	6
かな	218	147	22	21	16	8	3	1
33	3	3	-	-	-	-	-	-
32	42	42	-	-	-	-	-	-
31	109	102	7	-	-	-	-	-
30	11	-	11	-	-	-	-	-
29	12	-	4	8	-	-	-	-
28	4	-	-	3	1	-	-	-
27	13	-	-	8	5	-	-	-
26	10	-	-	2	5	3	-	-
25	3	-	-	-	2	1	-	-
24	4	-	-	-	-	2	1	1
23	3	-	-	-	-	-	2	1
22	2	-	-	-	-	-	1	1
21	1	-	-	-	-	1	-	-
20	1	-	-	-	-	-	-	1

万葉集における仮名と漢字

巻5

長歌	漢字	0	2	5	9	14	22	54	75	100	107
かな	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
55	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
126	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
148	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
149	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
151	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
157	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
176	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
230	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
293	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
335	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-

巻20

長歌	漢字	0	18	20	23	29	32
かな	6	1	1	1	1	1	1
91	1	1	-	-	-	-	-
209	1	-	-	-	-	1	-
274	1	-	-	-	-	-	1
290	1	-	-	-	1	-	-
331	1	-	1	-	-	-	-
430	1	-	-	1	-	-	-

る3.1% = 漢字数1 ÷ (漢字数1 + 仮名数31) である。しかも、3首あるいは7首、すなわち各巻短歌全体の2.8% = 3首 ÷ 104首あるいは3.2% = 7首 ÷ 218首にしか至らない。

文字数による短歌の事例を挙げる。() 内に 仮名数 + 漢字数 を記し、短歌の前に巻序-国歌大観番号を添える。

(33+ 0)

5- 795 いへにゆきて いかにかあがせむ まくらづく つまやさぶしく おもほゆブしも
20-4449 なでしこが はなとりもちて うつらうつら みまくノほしき きみにもあるかも

仮名表記主体の諸巻に囲まれた巻16・巻19で漢字比率40%台、長歌数が短歌数より多い巻13で70%近くであると思われる。その他の巻でも60%前後であろうと感じられる。それらに比するならば、巻5・巻20の長歌でも漢字比率が小さい。

なお、本稿で議論しているものは、謂わゆる漢字含有率の延長上にある。そこでは、漢字であるか仮名・ラテン文字などであるかという字種のみが問題になり、文字の用法には及ばない。しかし、仮名用法の文字数を集計したり、全拍のうちで仮名用法で記されている拍数を集計したり、することも、本稿では立ち入らないが、当然、問題として考えられてよい。

・ 短歌一首に漢字が幾字現れるか

各巻の一首ごとの漢字数・仮名数を集計し、短歌と長歌とに分けて次ページの表とする。表の左上のあたりを読むならば、巻5は短歌数104であり、漢字数0のもの、すなわち専ら仮名で記されているものは、合計78首、うち仮名数33が2首、仮名数32が12首、仮名数31が64首である。仮名数31のものは、ほかに漢字数1が2首あって合計66首である。漢字数1のものは、ほかに仮名数30が3首あって、合計5首である。……。網かけの部分は字数の軸であり、斜体の数字は、右または下に立体の数字で並ぶものの合計である。

一卷の短歌数のうちで漢字数0ないし3の短歌数が占める百分率を求めると、次のようである。巻5では、短歌全104首のうちで漢字数0の短歌は78首、比率75.0% = 78首 ÷ 104首であり、漢字数1は5首、比率4.8% = 5首 ÷ 104首、……となる。

	漢字0	漢字1	漢字2	漢字3
巻5での比率	75.0	4.8	3.8	4.8
巻20での比率	67.4	10.0	9.6	7.3

巻5・巻20いずれでも、漢字数0の、仮名のみで記された短歌が多いが、集中の度合いで巻5のほうがやや勝っていると見える。仮名数との関係では、どちらの巻でも漢字数0+仮名数31のものが最も多く、ただし、巻5で61.5% = 64首 ÷ 104首、巻20で46.7% = 102首 ÷ 218首であって、巻5での集中が大きい。短歌全体における漢字の比率は、巻5の3.6%と巻20の2.4%とで巻5が大きかったが、その巻5において、漢字を用いない短歌への偏りが大きいというのは、意外であると言ってよい。巻5において、漢字数が多い短歌があることが、その意外な結果の原因であると、この表は語っているであろう。

巻5・巻20の短歌全体における漢字の比率は、平均値というものの一つの姿ながら、実際の漢字数+仮名数の組み合わせとしては実現していない。最も近いところを求めると、巻5で3.6%に対する3.2% = 漢字数1 ÷ (漢字数1 + 仮名数30)、巻20で2.4%に対す

れる。元永本古今和歌集巻20の冒頭歌は、仮名を元の漢字に戻すならば、および、その一般的な翻刻を示すならば、次のようである。

安当良之支 止之乃波之免爾 閑俱之古所 千歳遠金天 太乃之支遠川女
あたらしき としのはじめに かくしこそ 千歳を金て たのしきをつめ

万葉集の漢字原文と、ここに述べた仮名・漢字への置き換えとを、この2行に見立てることができる。

3 漢字

万葉集巻5および巻20の和歌本体における漢字の定量的様相を、次の3点で見る。

- 漢字はどのような比率であるか
- 短歌一首に漢字が幾字現れるか
- どのような漢字が幾度現れているか
- 漢字はどのような比率であるか

漢字の出現頻度、および文字全体すなわち仮名との合計に対する百分率は、次のようである。短歌と長歌とに隔たりがあるので、分けても集計する。左のあたりを読むならば、万葉集巻5の和歌全体では、文字延べ5,360字、うちで漢字503字、漢字の比率 $9.3\% = 503 \div 5,360$ 字であり、漢字異なり268字である。巻5の短歌では、文字延べ3,152字、漢字115字、漢字の比率 $3.6\% = 115 \div 3,152$ 字、漢字異なり91字である。……。念のため、歌数および一首あたり文字数を添える。小数は下位を切り捨てる。

	巻5	全体	短歌	長歌	巻20	全体	短歌	長歌
延べ 文字		5360	3152	2208		8460	6713	1747
漢字		503	115	388		287	165	122
比率		9.3	3.6	17.5		3.3	2.4	6.9
異なり漢字		268	91	225		119	76	68
歌数		114	104	10		224	218	6
平均文字数			30.3	220.8			30.7	291.1

巻ごとの漢字比率は、巻5の9.3%と巻20の3.3%とで大きく隔たる。仮名表記主体の他巻における漢字比率は、概算してみると巻14・巻15で5%前後、巻17・巻18で8%前後である。つまり、仮名表記主体六巻のうちで、漢字比率は、巻5が最大、巻20が最小であると見込まれる。

しかしながら、漢字比率は、短歌と長歌とでも大きく隔たる。短歌のみを取り上げるならば、巻5・巻20とも非常に小さくなって3%前後である。巻14は短歌のみで構成されているが、その漢字比率に比べても小さい。

もの、義訓のものが、基本である。「見在〈みたり〉知在〈しりたり〉」(5-894)の「…在」のように義訓に準ずると見られるものもある。そのほかに、仮名と言わず、漢字と言うものには、「いのちすぎ南〈なむ〉」(5-886)の「南」のように、一字でその字義に関係せず数拍に対応するものを含む。文字と形態との境界が一致しない「かくや歎敢〈なげかむ〉」(5-901)もある。所在は、この()内のように、巻序-国歌大観番号で示し、漢字に対する訓みを、必要に応じて〈 〉に括る。

正訓が一拍である漢字は、仮名とせずに、漢字とする。「日〈ひ〉」「見〈み〉」などである。

仮名と漢字との別は、以上が原則である。この原則の上に、幾つか規定を加える。

返読をする部分は、漢語訳表記であると見ることができ、その部分のすべてを漢字とする。「死〈しに〉は不知〈しらず〉」(5-897)、「数〈かず〉にも不在〈あらぬ〉」(5-903)、「み船は將泊〈はてむ〉」(5-894)の「不知」「不在」「將泊」などである。

地名・人名も一字一音である限りでは、仮名とする。漢字原文を〈 〉に括るならば、「なら〈奈良〉ノみやこに」(5-806)・「いづ〈伊豆〉手ぶね」(20-4336)・「つくは〈都久波〉ねを」(20-4367)・「コノキ〈紀〉ノやまに」(5-823)・「むらじ〈牟良自〉がいそノ」(20-4338)、「みをり〈美婁利〉ノさとに」(20-4341)、「あすは〈阿須波〉ノかみに」(20-4350)などである。ただし、一字数拍の漢字に接するばあいには、一拍に対応しても漢字とすることがあり、「筑紫〈つくしノ〉国に」(5-794)、「大野山〈おほのやま〉」(5-799)、「難破津〈なにはつ〉に」(5-896)、「吾子古日〈ふるひ〉は」(5-904)などである。

また、地名に限らない原則として、仮名には助詞などの読み添えがないものとし、すなわち、読み添えがあれば漢字であるとするとする。いま引いた「筑紫国」(5-794)の「紫」も助詞「ノ」の読み添えがある。「御津〈みつノ〉浜ビに」(5-894)、「御津〈みつノ〉松原」(5-895)の「津」も同様である。この「御津」は、「御」を仮名とするのがよいとも考えられ、『注釋』の訓み下しも「み津」としているが、「津」を漢字としたことに伴い、「御」も姑く漢字とする。

漢字の字義に合っても、一拍の助動詞・助詞・接辞に対応しているものは、仮名とする。「人は〈者〉あらじト」(5-892)、「世人〈ヨノヒト〉ノ〈之〉」(5-904)、「云〈いへる〉が〈之〉如〈ゴトク〉」(5-892)の「は〈者〉」「ノ〈之〉」「が〈之〉」などである。『時代別国語大辞典 上代編』(1983年、三省堂)「主要万葉仮名一覧表」は、「は〈者〉」を挙げるが、「ノ〈之〉」「が〈之〉」を挙げない。なお、上に返読として挙げた「不」「將」は、返読のゆえに漢字である。

以上のような原則および付加規定は、地名・人名の扱いを除くならば、平安時代以降の文章の翻刻を行う際に、何を漢字とするかという方針と、隔たるものではないと思わ

万葉集における仮名と漢字

石 井 久 雄

1 問題

万葉集巻5および巻20の和歌本体において、漢字がどのように存在しているか、その様相を定量的に検討する。

元永本古今和歌集巻1および巻20の短歌表記につき、仮名が重用されていることを遠藤（2005）が指摘し、石井（2009）で定量的に確認した。石井（近刊）は、また、高野切古今和歌集などについても、仮名がほとんど見られないことに言及する。和歌が元は専ら仮名で記されたであろうと、推測することができることになる。

仮名専用ないし重用の源流を万葉集に見ることができるか、あるいは万葉集と古今和歌集とは異なるか、それを検討したいというのが本稿の発想である。万葉集も、仮名表記主体と言われる巻5・巻14・巻15・巻17・巻18・巻20に就くべきであり、その仮名の様相から見るのが理念であると思われる。しかし、その手段を考えることができないので、取り敢えず巻5および巻20を取り上げ、また裏からあるいは奇矯であるかもしれないが、漢字のありかたによって見てみることにする。

万葉集は、漢字原文・訓み下しとも、澤瀉久孝『萬葉集注釋』全20巻（1957—1968年、中央公論社）、およびその『本文篇』（1970年）・『索引篇』（1977年）による。本稿で扱う和歌本体というのは、詞書・左注などを含まないとともに、「一云」などで示されるものも含まない。

2 仮名

本稿に万葉集の仮名と言うものは、一字で一拍に対応する音仮名ないし訓仮名に限定する。挙例に当たっては、仮名は平仮名で記し、ただし、乙類音に対応すると考えられるものは片仮名により、かつハ行・バ行エ列を「フ・ブ」に置き換え、またヤ行エ列を「エ」とする。清音・濁音への対応を区別する。仮名の反復符号は、対応の甲類音・乙類音を顧慮せず、「ゝ」「ゞ」とする。

漢字と言うものは、漢語を記した「布施〈ふせ〉おきて」（5-906）など、また、正訓の